

エゾサンショウウオ幼形成熟個体の再発見

岡宮久規 ふじのくに地球環境史ミュージアム

幼形成熟とは一般に、幼生期の形態的特徴を維持したまま性成熟に至る現象を指す。北海道に生息するエゾサンショウウオが幼形成熟することは今から遡ること約 100 年前、北海道大学水産学部の教官であった佐々木望博士によって報告された。登別温泉からほど近いカルデラ湖である倶多楽湖で採集されたエゾサンショウウオは、外鰓や発達した尾鰭など幼生の特徴を保持しながら性成熟しており、湖底で繁殖していたという。報告が行われた 1924 年発行の北海道帝国大学農学部紀要には、発見時の興奮が伝わる筆致でその詳細が記されている。しかし、この集団は養殖のために導入されたヒメマス捕食によって間もなく絶滅してしまい、倶多楽湖での幼形成熟個体の確認は 1932 年に牧野佐二郎博士によってなされた 2 個体が最後とされる。その後、道内の他地域も含めてエゾサンショウウオの幼形成熟は確認されなかった。

2021 年に我々のグループは約 90 年ぶりとなるエゾサンショウウオ幼形成熟個体の再発見を報告した。胆振管内の池から採集された大型の幼形個体 3 個体は、外部形態の比較、精子観察、人工授精実験の結果から幼形成熟した雄個体と結論付けられた。今回の講演ではこの再発見について経緯を振り返りながら紹介する。論文では触れられなかった捕獲時の様子や、その後に行われた指骨による年齢査定の結果、幼形成熟個体が移送され飼育観察が継続されている世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふでの経過報告など、これまで未発表の内容についても紹介する予定である。また、幼形成熟集団の発見を目指して行われた北海道でのフィールドワークの様子やそこでの発見についても豊富な写真や動画を交えて紹介したい。

